

## 9. 社会階層・教育・ジェンダー

吉田 文  
教育・総合科学学術院

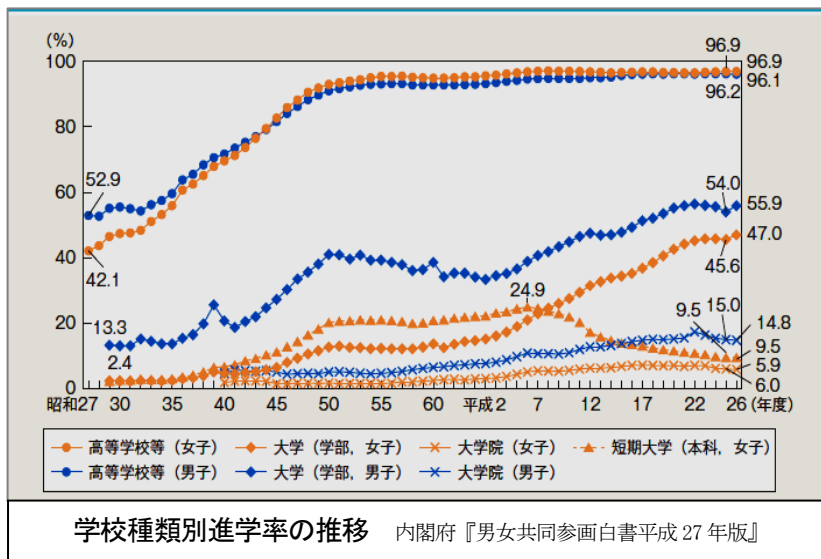
### 1. はじめに

私の専門は教育社会学である。教育社会学は社会の中で教育はどのようなメカニズムを持ち機能しているのかを考える。今日は、社会階層と教育とジェンダーに関する問題を考えるが、できるだけ双方向的に授業を進めたい。私が使用するテクニカルタームがなじみがなかったら、遠慮せずに質問をしてほしいし、私も皆さんに問いかけをしたいのでその際には是非意見を聞かせてほしい。

### 2. 男子は理系・女子は文系？

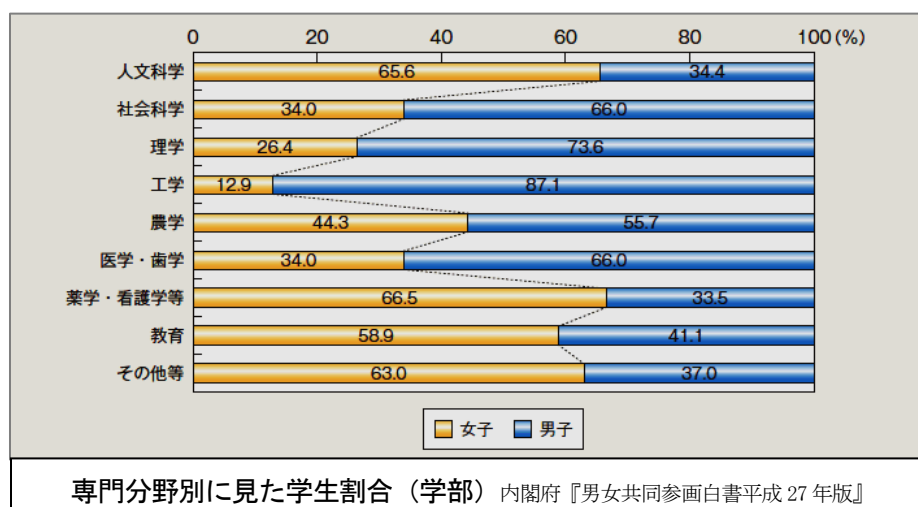
内閣府『男女共同参画白書平成 27 年版』から男女別の学校種類別進学率の推移を見ると、高校については男女ともに 1974 年に 9 割を超え、現在はほぼ全員が進学する状況が続いている。一方大学進学率は、平成 26 年度現在、男子 55.9%、女子は 47.0%と 10 ポイント弱の差がある。1960 年代半ばから 1990 年代にかけて女子の主たる進学先は短大であり、教育年数は男子よりも圧倒的に少ない時期が 20 年以上

続いた。1990 年をピークに短大進学率は急激に降下し、女子も四年制大学へという動きが始まったが、皆さんのご両親が学生の時代は女性は四年制大学へ行かない方がよいと言われていたのである。当時は 24 歳までに結婚しないと行き遅れるという「24 歳神話」があり、22 歳まで大学に行くと婚期が遅れると考えられたわけである。



専攻分野別に学生分布をみると、女性が多いのは人文科学だったが現在は社会科学や理学工学が少し増えた。男性は社会科学が減りそれ以外に分散したが、理学工学が多いということは変化しておらず、女子は文系・男子は理系という傾向は明瞭である。近年は「リケジョ」という言葉があるが、現在でも理系の女子はマイノリティである。

一方、専門分野ごとの男女割合を見ると、人文科学は女性が多い。社会科学は男性が主流で、理学工学では女性はやはりマイノリティである。農学、医学、薬学は近年女性が増えており、教育は女性が多い。こうした専攻分野の男女差傾向は大学院ではさらに強くなる。



### 3. 教育における性差は生まれつき？

ではこうした教育上の性差は生得的なのだろうか後天的なのだろうか。小中学校における、国語と算数のテストの点数と意欲—その教科が好きや学びたいといった意識について男女別平均値を比較すると次のような結果になる。小学生の場合は、国語は学力、意欲共に女子が男子を上回る。算数の場合、5年生まではテストの平均点にはほとんど差がなく意欲は女子の方が高いが、6年生になるとこれが逆転する。中学になると国語は小学校と同様だが、数学は中2になると男子の方がよくできるようになり、中3はさらに差が広がり学力・意欲共に男子が女子を上回る<sup>18</sup>。

表1 学年別にみた国語、算数の学力・意欲のジェンダー差：小学校

		国語						有効 度数	算数						有効 度数
		学力			意欲				学力			意欲			
		平均値	差	標準偏差	平均値	差	標準偏差		平均値	差	標準偏差	平均値	差	標準偏差	
小3	男子	70.1		16.496	67.8		16.866	2012	80.3		14.189	80.7		19.508	2014
	女子	75.5	5.4 ***	15.047	73.6	5.8 ***	15.875	1956	79.6	-0.7	14.396	81.2	0.5	17.731	1959
小4	男子	71.0		15.307	68.0		18.283	2009	78.7		17.993	72.2		21.627	2010
	女子	75.8	4.8 ***	13.896	73.4	5.4 ***	17.227	1961	79.2	0.5	15.946	74.5	2.3 ***	19.668	1962
小5	男子	74.3		17.377	68.5		17.352	1969	72.7		18.952	73.7		23.886	1971
	女子	80.6	6.3 ***	14.180	70.9	2.4 ***	15.912	1944	74.0	1.3 *	16.627	75.4	1.7 *	21.153	1948
小6	男子	70.2		17.414	70.8		18.432	1944	65.5		20.072	77.1		23.983	1941
	女子	76.4	6.2 ***	14.890	75.0	4.2 ***	16.640	1933	65.2	-0.3	17.854	75.8	-1.3 +	23.107	1926

表2 学年別にみた国語、数学の学力・意欲のジェンダー差：中学校

		国語						有効 度数	数学						有効 度数
		学力			意欲				学力			意欲			
		平均値	差	標準偏差	平均値	差	標準偏差		平均値	差	標準偏差	平均値	差	標準偏差	
中1	男子	69.2		16.178	60.9		18.297	1670	62.5		20.157	62.3		19.135	1674
	女子	73.9	4.8 ***	14.786	63.9	3.0 ***	16.375	1552	62.0	-0.5	17.957	60.8	-1.5 +	18.731	1553
中2	男子	60.7		17.022	57.2		20.299	1498	53.3		19.924	58.6		21.197	1504
	女子	67.3	6.6 ***	16.013	59.7	2.5 **	19.391	1400	51.1	-2.2 **	17.938	53.6	-5.0 ***	21.229	1403
中3	男子	67.7		16.651	57.5		18.605	1433	53.1		20.658	55.0		23.672	1437
	女子	72.4	4.7 ***	14.189	58.6	1.1	18.369	1350	51.4	-1.7 *	17.837	51.6	-3.4 ***	22.926	1356

注：1) t検定 \*\*\* p<.001 \*\* p<.01 \* p<.05 +<.1  
2) 表中の「差」は各カテゴリー内の女子-男子の値

<sup>18</sup> 伊佐夏実・知念渉 (2014) 「理系科目における学力と意欲のジェンダー差」『日本労働研究雑誌』No. 648.

15歳で受験する PISA (2012) の結果をみると、数学的リテラシーは女子の平均点が男子のそれを上回った国が 42 カ国中 5 개국、逆に男子が上回った国は 36 カ国だった。日本では男子が 18 点女子を上回った。読解力は 66 カ国全てで女子が高く、日本でも女子が男子を 24 点上回った。科学的リテラシーも女子が男子を上回る国が 17 カ国とはるかに多い。しかし日本は男子が女子を 11 点上回った。

なぜ男子の読解力は小学校から高校まで低く、女子の数学的リテラシーは低下するのだろうか。男女の平均点の差に生得的なものが全くないとは言わないが、生得的なものだけですべてを語れないということも強く言いたい。例えば教育プロセスにおいて、教員が男子生徒ができた時にもっと頑張れと言ひ、女子生徒ができた時にはそう言わないといったことがある。幼児教育では「男の子はあっち、女の子はこっち」のように、多くの場面で男女を分けることが行われる。参与観察調査では、こうした行為によって子どもたちがジェンダーを獲得していくことが明らかになっている。

#### 4. 教育達成を規定する要因は？

進学を規定する要因は何かを考えてみよう。皆さんはメリトクラシーという用語を知っているだろうか。メリトクラシーは 1958 年にイギリスの社会学者マイケル・ヤングが、アリストクラシー（貴族性社会）に対応させて提唱した<sup>19</sup>。属性ではなく本人の能力と努力で社会的地位が決まる社会という概念である。対して、教育達成はその人の所属する階層がどれくらいの資本を持っているかに影響を受けるとしたのがブルデューの再生産論である<sup>20</sup>。ブルデューは、教育達成は家・階層が持っている文化資本の量に深く関係すると論じた。例えば、教育に対してどれくらい熱心か、美術や音楽活動に何を愛好するか、日常生活で余暇をどのように過ごすかといった様々な文化的領域での活動は階層ごとに異なる。なかでも中産階級の文化は学校で教える文化との親和性が高い。家庭で経験する文化と学校で教えられる文化が最も近い中産階級の子どもたちが、教育達成において最も成功するのである。

さらに近年言われているのがイギリスの社会学者のフィリップ・ブラウンが提案したペアレントクラシーだ<sup>21</sup>。これは親の富と親の願望を足したものとして、親がどのような子どもの教育の選択をするのが子どもの社会達成に大きな影響を与えるという研究である。彼は、親が期待をもって早期から子どもの教育選択を手伝うことが子どもの教育達成に大きな影響を持ち、2000 年代は再生産よりペアレントクラシーが重要になっていると述べている。

では日本はどのようなのだろうか。成績、家計所得と高校卒業後の進路の関係を見てみよう<sup>22</sup>。成績別に高校卒業後の進路をみると、国立大学進学は成績との相関関係が男女とも成立するが、私大進学では男女で差異がある。男子の場合、進学と成績にあまり関係せず、成績が下位でも進学する。これは、現在の日本では私立大学数が多く、上位大学にこだわらなければ成績が良くなくても進学

<sup>19</sup> マイケル・ヤング、窪田鎮夫・山本卯一郎訳（1958=1982）『メリトクラシー』至誠堂選書

<sup>20</sup> ブルデュー、パスロン、宮島喬訳（1970=1991）『再生産』藤原書店

<sup>21</sup> フィリップ・ブラウン（1997=2005）「文化資本と社会的排除」『教育社会学：第3のソリューション』九州大学出版会、pp. 597-622.

<sup>22</sup> 小林雅之(2007)「高校生の進路選択の要因分析」『大学経営・政策研究センターワーキングペーパー』No.19. ([http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/resource/crump\\_wp\\_no19.pdf](http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/resource/crump_wp_no19.pdf) 2016年12月12日最終閲覧)

が可能だということを示す。一方、女子は男子と異なり私大進学と成績が相関関係にあり、成績が下位の場合は大学にはいかず専門学校などに行く。

次は家計所得別の進路であるが、国立大学は男女ともに家計との相関関係はない。私大進学は、女子の場合は家計との相関が明瞭で、家計が裕福でないと進学率が男子よりもずっと低くなる。一方男子は一定程度の相関はあるものの、女子よりは低い。

子どもは進学決定に際して、家計状況をどのくらい気にしているのだろうか。進路決定の際に考慮する点を聞いた調査では、女子の方が家計状況を気にしたという答えが多かった。さらに所得別成績別に私大の進学率を見ると、所得が400万円以下では男子の進学率が30%弱に対し、女子は10%に過ぎない。こうしたデータから、女子の私大進学率は成績よりも家計に依存することが分かる。男子は将来家計を維持するために、成績や家計状況によらず、四大に行かねばならないが、女子は専業主婦という道が残されており成績が悪ければ進学しなくてもよいという意識が見て取れる。また、女子は成績が良ければ「男子と同じように頑張らなさい」と言われるが、成績が悪いと「あなたは女の子だから」というドライブが働くとも考えられる。

## 5. 「女子」はつくられる？

本日は、教育機関内の男女の処遇に差異はないといわれるがどうか、女子の教科の選好はなぜできるのかについて検討してきた。男女ともに作られてくる側面があるだろうという意見も出たし、女子は社会階層の影響を受けやすく、家計所得を意識して進路専攻するという姿も見えてきた。こうした状況についてみなさんはどのように考えるだろうか。

### 学生の意見

- ①成績が低い女子は進学したくても「女の子は…」と言われ、男子は進学したくなくても「男子なんだから…」と言われるというような問題が男女差で生まれると思うので対処すべきだ。
- ②教育従事者の意識を変えること、進学を選択した人に教育費が与えられるような制度—例えば教育が無償になれば皆が学ぶことができる環境になるのではないか。
- ③私は女子高出身で同級生の2割ぐらいが短大に行った。理由は保育士や看護師の資格取得だった。保育士や看護師は女性向けの職業という意識が、進学の男女差を生み出すという社会構造がある。個人の選択を変える必要はないが、女性向きの仕事という考えをなくすことは必要だ。
- ④勉強すれば数学の成績は良くなるが、勉強できる環境にいるか、いないかという問題もある。貧困家庭でも男子には先生が進学するように手を尽くすが、女子は短大でいいからと放り投げてしまう傾向があるのではないか。家計所得が低いなど不遇な立場にいる女子に、情報を教えたり手助けやアドバイスをする人がいれば変化が生じるのではないか。

問題は複雑なので何かを変えたら全てが一挙に解決するわけではない。しかし本人の意思だと思っていることが様々な部分で規定されているということを皆さんに知ってほしかった。メリトクラシー社会と言いつつペアレントクラシーになりつつあるということも紹介したが、このことは将来親になった時にも覚えていてほしい。